



投稿数26句

選作豊間引

学校を去る人の背に春入り日

皆野 桜井 早苗

(評) 去る人とは、卒業生ではなく、それを済ませた教師だろうか。この学校で何回か、巣立ちの子等を送り出した門を、今日は自分が移動か退任かで、去ることになり、馴染んだ校舎、教え子と泣いたり、笑い転げた運動場や、校庭の隅の植込みにも、忘れ得ぬ思いがこめられている。思えば着任の日も一人だった。今日こうして独りで去る背を、すでに山に傾く春の没り日が優しく送ってくれる。

土手焼の炎も見えず進み行く

片栗の花咲く沢に水の音

下田野沢 小川 もと

下田野 根岸 進

薔薇の芽や空を見上げて大欠伸

春の月のろろ山へ隠れけり

下田野 藤原 道男

下田野沢 高山 ユウ

山裾にゆるる灯し火春寒き

花を追い花に追われし一日かな

下田野沢 五十嵐静枝

皆野 植竹美恵子

花吹雪たたみし佳信またひらく

秩父路に巡礼の音や山わらふ

下田野 中田 久恵

国神 松岡 千恵

朝の気の清しさにあり初音きく

春眠や腓がへりにはつと覚め

三沢 長谷河ソノ

三沢 新井 叶子

荒東風や仔犬に曳かれて峠まで

ふと眠るほほ杖ついて春炬燵

金沢 青木富佐子

金沢 関和 トヨ

亡き級友を想い出させる桜かな

花曇り客来る報せうどん打つ

皆野 新井 茂

三沢 沢野 恒平

地下足袋で桜眺めて昼飯さ結飯の米粒類におよぎし

下田野 藤原 道男

組ひもを小さな指でパツパツと男曾孫の指手品師のごと

皆野 塩田 千代

皆野腰初午稲荷大祭に一年振りの逢う人懐かし

皆野 新井 茂

ほのぼのと蓄いろづく家桜朝な夕なに両手をかざす

下田野 中田 久恵

直売所へ出荷の葱苗完売し殊に旨しや晩酌二合

皆野 金子善次郎

闘病に耐えたる氣力安らかに兄は尊き人生閉じぬ

皆野 新井 愛子

山麓の年寄り多き過疎の地に娘が来るとよ聞くに歎び

野巻 町田 忠次

不隨の身となりても凜と歌詠みの道を説かれし師の遺影笑む

三沢 真下 杏子

歌ごころ励まし給ふ師は逝きぬ涙の如く春雨の降る

三沢 新井 民子

わが送るメールの文字が違ひなく先方に届く科学の不思議よ

三沢 新井 叶子

生ありて避けざることと思へども胸迫り思ふ師の訃報あり

金崎 山田 雅子

起き返りにこりと笑ふ曾い孫の届いたビデオ手を叩き見る

皆野 吉岡 ヨシ

降りそむる雨の手数のてぐさみに端切れつなぎてお手玉を縫ふ

皆野 笠原三江子

投稿数13首

※本誌短歌選者として昭和55年から26年にわたり町民の文芸振興に「尽力をいたしました佐宗利信様が逝去されました。永年のご尽力に心より感謝申し上げますとともに、「ご冥福をお祈りいたします。」

俳句・短歌を募集 (8日必着)

作品には、ふりがなをつけ、住所・氏名を明記して企画課へお寄せください。1人1句、1首に限ります。